

演題5. 老人口腔検診における CPITN を用いた歯周疾患罹患状態の調査

○高橋 通訓, 梁川 輝行, 松丸健三郎,  
代表: 高橋 寛\*, 北田 武夫\*

岩手医科大学歯学部保存学第二講座  
岩手県歯科医師会老人歯科保健委員会\*

前回の学会において我々は, CPITN を用いて岩手県下の5地区の歯周疾患の有病状態及び重症度の把握を試み, その結果, (1)歯周組織に何らかの異常が認められたものは, 40才以上では, 地域成人の93.5~100%に達していた。また一人平均の有所見分画数からみると, 40~69才では, 口腔の $\frac{1}{4}$ 以上の部位に異常が認められた。(2)増齢に伴ない, 「出血のみの者」や「歯石の者」という軽度の者の割合は減少傾向を示し, 4mm以上の「歯周ポケットの者」(P1+P2)の割合は横ばい, あるいは増加の傾向を示した。(3)一人平均の有所見で4mm以上の歯周ポケットの分画数は0~0.61であったことを報告した。

今回は, 前回と異なる地区の歯周疾患の有病状態及び重症度の把握を試みたので報告する。

調査地区は, 岩手県内の3地区(石鳥谷: 39才~77才 92人, 金ヶ崎: 24~73才 95人, 東和: 41~78才 109人)で, 検診に応じた296人を調査対象にした。調査は, 2名の歯科医師に歯鏡とWHOプローベ(山浦製)を用いて, 前回と同様の方法で行われた。各々の分析は, 年齢層別(40才未満, 40~49, 50~59, 60~69, 70才以上)に行った。その結果, (1)歯周組織に何らかの異常が認められたものは, 40才以上では, 90~100%に達していた。また一人平均の有所見分画数からみると, 異常が認められたのは, 40~69才で2.97~5.04であった。(2)増齢に伴ない, 「出血のみの者」や「歯石の者」という軽度の者の割合は, 減少傾向を示し, 逆に4mm以上の「歯周ポケットの者」(P1+P2)の割合は横ばい, あるいは増加傾向を示した。(3)一人平均の有所見で, 4mm以上の歯周ポケット分画数は40~60才で, 1.26~2.82であった。(4)有病者率と一人平均の有所見でみると, 機能喪失は, 増齢と共に増加傾向を示した。

演題6. 肉芽腫性口唇炎が疑われた5例の臨床的検討

○石川富美子, 澤口 通洋, 福田 容子,  
小川 光一, 戸塚 盛雄, 宮澤 政義\*,  
星 秀樹\*\*

岩手医科大学歯学部歯科予診室  
岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座\*  
岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座\*\*

肉芽腫性口唇炎は, 1945年 Miescher が最初に報告して以来多くの追加報告がなされて来た。本症は特に口唇の腫脹を主要な症状とする疾患で, 組織学的には類上皮細胞性肉芽腫性炎症像を呈するものとされている。

今回我々は, 昭和57年8月から昭和61年6月までの新来患者のうち口唇に著明な持続性のび慢性の腫脹を生じ, 臨床的所見より肉芽腫性口唇炎と思われる5例について, 臨床的に検討を加えたので報告した。

本症例は男性3例, 女性2例で性差は認められず, 発症年齢は34歳から52歳と中年者に発症していた。腫脹部位は下口唇3例, 上口唇1例, 両側に認められたもの1例であった。他の腫脹部位として, 顔面では頬部, 口腔内では頬粘膜が3例, 舌2例, 口蓋1例が見られた。

自覚してから来院までの期間は, 約2カ月から1年であったが, いずれも腫脹に気づいて以来症状が持続した例であった。

また, 本検索において腫脹の他の自覚症状として知覚異常を訴えた症例が3例存在し, うち1例は顔面神経麻痺, 溝舌を呈し Melkersson-Rosenthal 症候群を疑わせた。

本症例の5例中3例は慢性根尖病巣を有し, その歯牙を抜歯および根管治療をすることにより腫脹は軽減し快方に向ったこと, 発現部位と根尖病巣を有する歯牙の位置的関係にも関連性が見られたこと等により, 成因としては病巣感染が最も考えられた。

また, 1例においては血液検査で免疫グロブリンの異常等が認められ全身的要因が疑われたが, 患者の都合により通院不可能となり, その後連絡が取れず予後は不明である。

他1例は, 現在加療中である。